



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イタリア語における近過去形と遠過去形の「置き換え」について
Author(s)	CESPA, Marianna
Citation	研究論集, 13, 205(左)-223(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54070
Type	departmental bulletin paper
File Information	011_CESPA.pdf



イタリア語における近過去形と遠過去形の 「置き換え」について

チェスパ・マリアンナ

要 旨

本稿は、イタリア語における過去時制に属する近過去形と遠過去形の相関関係を明らかにすることを目的としている。伝統的な説明によると、過去時制である近過去形と遠過去形のあいだには相違点がなく、その使い分けが話者による選択であるとされている。つまり、話者の視点によって遠過去形が近過去形の代わりに、あるいは近過去形が遠過去形の代わりに用いることができることとされている。これは話者にとってその事象が過去の一時点であるなら話者は遠過去形で描写するのに対し、その事象の効果が現在まで持続するなら近過去形で描写するという区別である。しかし、様々な原因が影響を与えているため、その「置き換え」が不可能である場合も多く、また両方の時制が可能であるが解釈が同じではないという場合もある。これはおそらくそれらの2つの時制の本質の制限に関するものである。本稿はいつその「置き換え」が可能であるか、いつ不可能であるかまたなぜ制限があるかということに関して述べるものである。分析の結果、遠過去形における用法は幅が狭いのに対し、近過去形における用法は非常に幅が広いということが明らかになった。よって、近過去形と遠過去形の区別が重要な点であり、これに基づいて時制の一致のルールを見直すこともできる。

1. はじめに

伝統的な文法によると遠過去形と近過去形¹のあいだには相違点がありません、「置き換え」をすることが可能であるとされている。通常、近過去形で描写された事象を遠過去形に置き換

¹ 近過去形と遠過去形の選択に関しては話者の地方も影響を与えている。本稿は中部・北部における用法を基準とする。

えることができると説明されているが、実際にはそれは間違いである。分析してみると、換えられる場合と換えられない場合があるため、その区別を明確にしないと事態の時間的な解釈が正確ではなくなる可能性もある。簡潔に説明するところの二つの時制の本質が異なり、近過去形は「現在と関係のある過去」であるのに対し、遠過去形は「現在と関係のない過去」であるため、その「置き換え」が必ず可能であるとは限らない。その置き換えが可能となるのは近過去形が遠過去形と同様に現在と関係のない過去の用法の場合のみである。そして、通常、過去時制に属する近過去形と遠過去形は現在時制と無関係であるとされており、つまり「過去」と「現在」の間にはそれらを分ける線があるかのように思われているが、このような分離が正確であるかどうかを説明するのは本稿の一つの目的である。

2. イタリア語の時制

イタリア語においてはいくつかの「法²」が存在しているが、本稿では「直説法」のみを扱うこととする。坂本(1979:215)では「直説法とは、話者の主観を交えずに〈客観的な事実判断〉を表す叙法である。もちろん、動詞自体の意味であれば話者の感情・主観を表すこともあるが、この場合も話者の感情・主観の現実存在することを示しているにすぎないと考えればよい。こうした視点からすれば、直説法は、典型的な主観的叙法である接続法と対立する叙法であると言える」と述べられている。

直説法は「現在形」「半過去形」「遠過去形」「単純未来形」の四つの単純時制と「近過去形」「大過去形」「先立未来形」「先立過去形」の四つの複合時制を持つ。単純時制というのは動詞の語尾を変化させることで時制を表す形式であるのに対して、複合時制というのは助動詞である *essere* (～です) または *avere* (～持つ) と過去分詞などを組み合わせることで時制を表す形式である。

本稿で取り上げるのは「過去形(近過去形、遠過去形³)」のみであるが、現在形も関わっているため、簡潔に「現在形」に関しても述べていく。以下ではこれらの時制の時間的な関係に関して述べる前に、どのような時制であるかを見ていく。まず、イタリア語文法の教科書におけるこれらの時制の定義⁴を挙げる。

² 「法」とは、言語表現の内容に対する話し手の態度が反映された動詞の形態のことである。事態の成立が可能であることを表すための一連の語形変化を「接続法」と呼び、事態が完全に事実であるかまたは完全に虚偽であることを表すため一連の語形変化を「直説法」と呼ぶ。

³ 過去時制においては「半過去形」「大過去形」「先立過去形」も存在しているが、ここでは省略する。

⁴ Salvi, Vanelli (2004)

【現在形】

‘Il presente indica simultaneità rispetto al momento dell’enunciazione, in genere con verbi durativi: il presente esprime un evento che dura per un lasso di tempo più o meno che include il momento dell’enunciazione’.

訳：現在形は動作が発話時と同時に
行なわれているということを表す。多くは、継続動詞とともに用いられる。現在形で表現される事象はおおよそ発話時を含む事象である。

【近過去】

‘Il perfetto composto indica un evento anteriore al momento dell’enunciazione sotto l’aspetto compiuto. L’importante non è tanto la distanza temporale dell’evento rispetto al momento della enunciazione, quanto che gli effetti dell’evento persistano ancora, o siano in qualche modo rilevanti per il parlante al momento dell’enunciazione’.

訳：近過去形は完了的アスペクトの視点で発話時点より前に行なわれた事象を表す。重要なのは発話時とその事象の間の時間的な距離ではあるが、それよりも話し手にとっては心理的にその事象の効果が発話時まで持続しているということである。

【遠過去】

‘Il perfetto semplice indica un evento anteriore al momento dell’enunciazione sotto l’aspetto perfettivo aoristico, senza alcun legame con il momento dell’enunciazione’.

訳：遠過去形はアオリスト的アスペクトの視点で発話時点より前に行なわれた事象のことを表す。近過去との主な違いは現在との関係であり、遠過去で描写された事象は発話時と無関係である。

上記の定義からわかるように、現在形と近過去形と遠過去形における相違点は、その事象と発話時点との相関関係（同時であるか以前であるか）に関するものである。しかし、近過去形も遠過去形も発話時点より前に行なわれた事象を表す時制であるため、同じ用法を可能とすると考えられるが、これらの時制は完全に同じ働きをしているとは言えない。定義にも述べているように、主な相違として考えられるのは前者が「完了的アスペクト」の視点で事象を描写するのに対し、後者が「アオリスト的アスペクト」の視点で事象を描写するということである。この点について述べる前に現在形と近過去形と遠過去形の一般的な用法を見てみていく。

2.1 現在形と近過去形と遠過去形の一般的な用法⁵

【現在形】

現在形は、本来は話者の目の前で繰り広げられる行為・状態を表すものであるが、現実には〈現在〉とは一時点のものではなく、現在を中心として過去・未来に繋がるある程度広い時間帯を表すものである。

- a. 話者の目の前で行なわれている現在の動作・状態

Il treno passa davanti a noi

(列車が私達の前を通っていく)

- b. 現在の習慣的動作・状態または恒久的・普遍的と考えられる動作・状態を示す。

Ogni giorno mi alzo alle sei e vado a letto alle nove

(毎日私は6時に起きて9時に寝ます)

- c. 過去に始まって現在もなお続いている動作・状態を示す。

Egli abita a Roma da cinque anni

(彼は5年前からローマに住んでいる)

- d. 昔の作家・哲学者などの考え方や文章を引用するとき、その考え方などが現在でも通用することを表す。

Cicerone scrive che la storia è maestra della vita

(キケロは歴史は人生の師であると書いている)

- e. 文学作品などで、過去の出来事を現在形を使って描写し、眼前に思い浮かばせる文体的効果を狙うことがある。これは歴史的現在と呼ばれる。

In un salotto si parlava della resurrezione di Lazzaro. ‘Cose antiche!’ esclama uno scettico.

‘Ai tempi nostri non capita davvero di vedere un morto uscire dalla tomba’.

(あるサロンでラザロの復活について話していた。「昔のことさ！ 今の世の中では死人が墓から出てくるのを見るなんてことは起こらないよ」と懐疑論者が叫んだ)

⁵ 2.1における全ての例文が坂本（2009）から引用したものである。

- f. 近い未来のこと、未来の確実なことを示す。

Domani partiamo per Napoli

(私達は明日ナポリに出発します)

【近過去形】

近過去形は、過去時制の中で一番よく用いられる形であり、現在と何らかの関係のある過去を示すのが本来の働きだと言える。この時制は「完了時制」の一つであるが、現在と何らかの関わりのある「完了」という点がこの時制の最大の特徴である。日常会話や口語的文体の文章で広く用いられ、話し手や聞き手の、その出来事への主観的関心や参加意識を伴うことが多い。近過去形の用法が様々であり、以下には代表的な用法を紹介していく⁶。

- a. 過去に始まって現在まだ完全に終わっていない周期（例：questa settimana「今週」、questo anno「今年」など）のうちに起こった動作・状態を示す。

Questo anno ho già visitato tre volte la Galleria degli Uffizi.

(今年になって私はすでに3度ウフィーツィ美術館を訪れた)

- b. 現在までの経験を示す。

Ho mangiato molte volte la bistecca fiorentina.

(私は何度もフィレンツェ風ビフテキを食べたことがある)

- c. 最近起こった動作・状態を示す。

Due anni fa sono andato a Kobe.

(2年前に私は神戸に行きました)

- d. 過去に完了した動作・状態ではあるが、その結果が現在にもなお残っているものを示す。

Anna è nata nel 1960.

(アンナは1960年に生まれた)

【遠過去形】

遠過去形は、現在とは全く関係のないある過去の一時点に起こったか、または一定期間続いたような動作・状態を表すことを特徴とする時制である。近過去形と並ぶ、完結した動作・状態を表す「完了時制」の一つであるが、物理的にも心理的にも現在とは切り離された過去で、

⁶ 坂本（2009：219）

その時間の長短にかかわらず、動作・状態は厳密にまとまった「形」として捉えられる。遠過去形の用法も様々であり、以下には代表的な用法を紹介していく⁷。

- a. 過去の特定の一時点において起こった動作を示す。

Cristoforo Colombo scoprì l'America nel 1492.

(コロンブスは1492年にアメリカを発見した)

- b. その始まりから終わりまでが明白であるような過去の一定期間続いた動作・状態を示す。

Quell'estate, rimasi per un mese alla villa del nonno.

(私はその年の夏、祖父の別荘に一ヶ月滞在した)

- c. 小説・物語の中で登場人物の動作、事件の推移、持続する事実などを描写する。

Un giorno il filosofo Anacarsi vide Solone, suo maestro, che preparava nuove leggi per Atene. Lo guardò e, con un tono un po'ironico, gli disse: -Le leggi somigliano alle ragnatele: cattureranno le mosche piccole, ma saranno lacerate da quelle grosse

(ある日、哲人アナカルシスは師ソロンがアテネのために新しい法律を用意しているのを見た。彼は師を眺め、少し皮肉をこめて言った。「法律とはクモの巣に似ていますね。小さなハエは捕らえても大きなやつには破られてしまいますから。」)

以上に述べた近過去形と遠過去形の用法における区別が簡単なものに見えるのだが、詳しく分析してみるとこれらの時制の関係はそれほど近くないことがわかる。

3. 近過去形と遠過去形の関係について

上記の定義からわかるように、遠過去形と近過去形は共に過去において完了した動作・状態を表す時制であり、そのため、両方は「完了時制」の枠に属している⁸。しかし、共通点はその過去において完了した事象の点のみであり、分析してみると完全に同じ働きをしていないということが明らかになる。なぜ異なっているかを以下で説明していく。

最初に伝統的な説明を見てみよう。伝統的な説明によると、近過去形と遠過去形における相違が発話時とその事象の距離と話者の心理的な判断によるものとされている。すなわち、一つの相違として近過去形は現在から近い過去の事象を描写するのに対し、遠過去形は現在から

⁷ 坂本 (2009: 225)

⁸ イタリア語では近過去形と遠過去形が「tempi perfettivi」(完了時制)と呼ばれている。

遠い過去の事象を描写すると挙げられている。しかし、この説明は不適切であり、その距離はそれほど関係がないと言える。そして、二つ目の相違として話者の心理的な判断のことが挙げられているが、この説明も不完全であると言える。以下ではこの二つの点をもとにして説明していく。

すでに見たように、近過去形も遠過去形も過去において完了した動作・状態を表す時制であるのだが、発話時と関わりがあるか否かという点に関しては異なっている。この点に関する結論を先に述べると伝統的な説明と異なり、近過去形は過去における事象のみではなく、現在における事象を表すこともできると言える。すなわち、近過去形は現在と繋がっている時制であるのに対し、遠過去形は現在と繋がっていない時制であるが、これはおそらく発話時とその事象のあいだの時間的な距離に関するものではなく、話者の関与に関するものであろう。話者にとってある事象の効果が心理的に発話時まで持続しているなら話者はその事象を近過去形で描写し、発話時とは無関係であるなら話者はその事象を遠過去形で描写するということである。しかし、現代イタリア語においては遠過去形の使用が徐々に減少している⁹上に、過去時制の選択においては個人差もあり、この二つの時制の使い分けに関する説明をすることは複雑なものである。伝統的な文法においては同じ事象を両方の時制で描写することが可能であるとされているが、常に可能であるということではなく、どちらかが不可能である場合もある。そのため、伝統的な文法の説明が不適切であるという視点から説明していく。以下では最初に両方の形式の適用ができる例文¹⁰を見てみよう。

- | | |
|--|--------|
| (1) Cristoforo Colombo <u>ha scoperto</u> l'America nel 1492 | (近過去形) |
| (2) Cristoforo Colombo <u>scoprì</u> l'America nel 1492 | (遠過去形) |
| (コロンブスは 1492 年にアメリカを発見した) | |

例(1)と(2)は共に「発見した」を意味するが、遠過去形を用いた例(2)は、発見の事実を過去の一時点に起こった客観的史実として述べているのに対し、例(1)は、発見の事実がすでに話者にとって認識され、その発見によりその後の歴史が続いていることも言おうとする主観的ニュアンスが含まれている。近過去形も遠過去形も用いることが可能であり、文法的な観点からどちらかを選ぶ必要はなく、これは話者による選択である。伝統的な説明では、この二つの時制を使い分けるには発話時とその出来事間の距離を観察しなくてはならないとされているが、本稿ではこの説明を扱わないこととする。なぜなら、距離に関する選択ではなく、いくつかの要

⁹ 歴史の教科書における使用はまだ残っているが、口語における使用は徐々に減少しているようである。

¹⁰ 坂本 (2009 : 226)

因を観察すべきであると考えられるからである。まず、距離の問題ではない確証として以下の例が挙げられる。

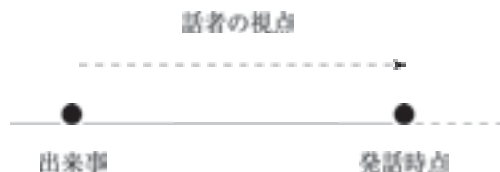
- | | |
|---|--------|
| (3) Ieri <u>ho incontrato</u> tuo padre | (近過去形) |
| (4) Ieri <u>incontrai</u> tuo padre | (遠過去形) |

以上の例文が文法的に正しく、「昨日」の事象を表していても遠過去形も用いることが可能である。従って、発話時とその出来事間の距離が長ければ遠過去形で描写し、短ければ近過去形で描写するという説明が不適切であることが明らかである。

例(1)と(2)と同様に、例(3)と(4)の場合においても、以上の例文は共に「会った」を意味するが、話者が伝えたいニュアンスは同じではない。例(3)は最近の出来事として述べているが、例(4)は現在と関係のない過去の事実として述べている。近過去形を用いた例(1)/(3)と遠過去形を用いた例(2)/(4)の相違を図で説明してみよう。

図1. 近過去形と遠過去形の相違

例(1)/(3)>近過去形



すでに述べたように、話者にとって心理的にその事象の効果が発話時まで持続しているということを表す時制は近過去形である。図の矢印の方向からもわかるように、過去における出来事は過去に終了するものではなく、発話時、つまり現在まで持続しているものである。これは事象自体が持続するという意味ではなく、持続するのはその効果のみであり、話者にとっては過去から現在までの過程が重要である。結局、近過去形の場合は発話時も含まれ、「現在形」に近い時制であると推測ができるだろう。このような関わりが存在しているため、本稿では近過去形を「現在と切り離されていない」時制と呼ぶこととする。そして、この概念に合わせて伝統的な時制の一致のルールを見直すこともできると提案できる。続いて、以下では遠過去形を説明する図を見てみよう。

例(2)/(4)> 遠過去形



以上の図からもわかるように、遠過去形と近過去形は同じ働きをしている時制ではなく、それぞれはあるニュアンスを伝えようとする時制である。近過去形と異なり、遠過去形で描写された出来事が発話時まで持続せず、過去におけるある一時点として描写される。すなわち、遠過去形は発話時を含まずその過去の視点から描写する。このため、本稿では遠過去形を「現在と切り離されている」時制と呼ぶこととし、伝統的な説明による互換性が完全に正しくない観点から述べていく。しかし、遠過去形も現在と関わりのある用法を可能とし、それは時間副詞との組み合わせによる用法である。

ここまで見てきたように、近過去形と遠過去形の用法には共通点があり、互換性も可能であるが不可能な場合も多いため、明確に区別をする必要があると考えられる。そして、時制を選択するには発話時とその出来事の関係のみではなく、話者の視点、つまり話者自体の位置と話者の伝えたい情報によっても決定されるだろう。

続いて、以下で互換性が不可能である例文を挙げ、その後になぜ不可能であるかに関して述べていく。最初に、副詞の制限のある例文を挙げる。

- (5) Marco è arrivato da 2 ore (近過去形)
 (6) *Marco arrivò da 2 ore (遠過去形)
 (マルコは2時間前から着いている)

例(6)が非文として感じられるのは時間を表す副詞「da」(～から)と対立するからである。なぜなら、「da」は現在と何らかの関わりを持っている副詞であるため、現在と絶対的に関わりを持っていない時制である遠過去形とは対立するからである。また、近過去形と異なり、遠過去形は複合時制ではなく、単純時制であることもこの用法において影響を与えられよう。

Bertinetto (1986) では「da+副詞」を可能とするのは複合時制のみであり、これは「設定時点¹¹」が存在しているからであると述べられている。要するに、複合時制を用いた例(5)の場合、

¹¹ Bertinetto では「Momento di riferimento (MR)」と呼ばれている。MR とはある事象の完了の局面

副詞は設定時点とその過程の終了の間の経過した時間を推断するのに対し、単純時制を用いた例(6)の場合、その設定時点がないため描写された事象の結果の残存もないと Bertinetto (1986) が述べている。近過去形と遠過去形と時間副詞の関係や制限などに関しては後ほど述べるため、ここではこれ以上述べないこととする。次に、近過去形と遠過去形の置き換えのできない例文として以下の例文¹²も挙げられる。

- (7) Un altro esame ancora e hai finito il corso (近過去形)
 (8) *Un altro esame ancora e finisti il corso (遠過去形)
 (試験をもう一つで過程を終了する)

例(8)は遠過去形を可能としない例文である。それは、この例文における事象は過去のことを表すのではなく、未来のことを表す例文であるため、必ず発話時以前の事象を描写する遠過去形にとっては不可能な用法であるということが言える。すなわち、遠過去形は過去における事象のみを描写することができるのに対し、近過去形は未来における事象の描写もできるということが明らかになる。近過去形も遠過去形もすでに終わった事象を表し、発話時に位置づけられることが一般的な用法であるが、以上の例文からわかるように近過去形の用法は時間的に幅が広く、遠過去形が可能としない用法を可能とする。ここで図1をもう一度参考にしてみると、次の説明もできる。近過去形における図の場合、点線が発話時までではなく、その以後も続くことが可能であるということが理解でき、これは遠過去形との主な相違であると言える。すなわち、近過去形における図を遠過去形における図を比較してみると遠過去形は過去における事象のみを表すことができるのに対し、近過去形はより幅の広い用法を可能とすることが明らかとなる。以下でこういった発話以降の持続のことにに関して説明していく。Bertinetto (1986) においては「完了時制」の枠に属している近過去形と遠過去形はアスペクト的な視点で異なり、前者が「完了」、後者が「終了」を表す時制であるとされている。

L'aspetto compiuto è quella particolare valenza aspettuale che esprime il perdurare nel momento di riferimento dato, del risultato conseguente ad un evento compiutosi in precedenza.¹³

訳：「完了的アスペクト」とは設定時点における以前に行なわれた事象の結果を表す特殊なアスペクトの一種である。

を示す時間区間のことを表す。完了性を表すため、複合時制のみに関する概念であると述べている。

¹² Giorgi & Pianesi (2002 : 51).

¹³ Bertinetto (1986 : 199).

L'aspetto aoristico è quella particolare valenza aspettuale che designa un processo interamente concluso, di cui viene visualizzato esclusivamente l'istante terminale, senza che tuttavia le conseguenze derivanti dal medesimo vengano considerate attuali dal parlante.¹⁴

訳：「アオリスト的アспект」とは完全に終了した事象の終了の局面のみを描写するものである。そして、発話時点においてはその事象の効果が話者にとっては無関係である。

本稿もこういった区別に基づいて述べていくが、近過去形における「完了」に関してはもう一つの区別をする必要があると提案する。まず、近過去形により描写される事象の「完了」を単なる「compiutezza」（完了）ではなく、「compiutezza provvisoria」（一時的な完了）と呼ぶこと、それに対して遠過去形により描写される事象の「終了」を「conclusione definitiva」（最終的な終了）と呼ぶこととする。前者の場合、発話時より前に完了した事象が描写されるが、その完了は発話時においては不定であり、反復の推測もされ得る。それと異なり、後者の場合、発話時より前に終了した事象が描写されるが反復の推測はされ得ないと言える。説明として、以下の例文が挙げられる。

(9) Lui ha letto la Divina Commedia (近過去形)

(10) Lui lesse la Divina Commedia (遠過去形)

(彼は神曲を読んだ（ことがある）／読んだ)

例(9)と(10)を図1に沿って説明すると近過去形を用いた例(9)は過去における事象を表しているが、特徴としてその事象の反復が可能であり、つまりその持続が不明であるという推測ができると言えるだろう。故に、「神曲を読む」動作は未来においても可能である。それに対し、遠過去形を用いた例(10)は過去における事象を表すことしかできず、その事象の反復は不可能であると推測できる。故に、「神曲を読む」動作は未来においても行なわれることはなく、過去の動作の描写にとどまる。このため、前者を「一時的な完了」、後者を「最終的な終了」と呼ぶこととする。このように考えると、例(7)と(8)の相違も明らかになってくる。例(7)が非文となっていないのは近過去形により描写された事象が反復可能であるため、未来における成立を可能とするからである。これを本稿では「compiutezza immaginaria」（想像上の完了）と呼ぶこととする。これは「compiutezza provvisoria」（一時的な完了）と異なり、その事象が必ず過去と現在において完了した事象ではなく、話者による想像上の完了を表しているものであるため未来における成立も可能となる。すなわち、例(9)と例(7)を以下のような図で説明することができる。

¹⁴ Bertinetto (1986: 429).

図2. 近過去形における完了性

例(9) *Compiutezza provvisoria* > (過去を基準としている)



例(7) *Compiutezza immaginaria* > (現在を基準としている)



以上の図で説明できるのは近過去形のみであり、遠過去形の説明ができないのは遠過去形が「完了」ではなく、過去における「終了」の概念を前提とする時制であるからである。

これらをまとめると、Bertinetto (1986) と Vanelli (2004) が述べているように近過去形と遠過去形の重要な相違はアスペクトの視点によるものであり、前者は「完了的アスペクト」の視点で事象を描写するのに対し、後者は「アオリスト的アスペクト」の視点で事象を描写する。また、その事象の反復が可能であるか否かという点は重要な点であり、さらに近過去形の場合は二つの「完了性」が考えられる。一つ目は過去に行なわれた事象の未来における反復の可能を表す完了性であり、二つ目は過去を基準とするのではなく発話時を基準とする完了性である。

最後に、なぜ以上の近過去形の「完了」と遠過去形における「終了」の区別が重要な点であるかについて説明すると、その用法により複文の解釈がかなり異なるからである。再び述べると、近過去形における「完了」の特徴は発話時においてその過程の効果残存を表すことであるのに対し、遠過去形における「終了」の特徴はその過程の終了局面のみを表すことである。詳細に述べると、前者の場合、その過程の効果が発話時まで持続しているという話者による心理的な判断が必要であるが、後者の場合、その発話時までの持続は無関係であり、重要なのはその事象の過去における終了局面のみであると言える。このため、遠過去形は近過去形と異なり、現在と未来における用法を可能としない。以下の例文¹⁵でこういった相違が明らかになるだろう。

¹⁵ Bertinetto (1986: 430).

- (11) Per consolarmi, cercai di pensare ad una madre che ha perso/perse il proprio figlio
(安堵するために、自分の息子を失ったお母さんのことを考えるようにした)

例(11)においては両方の時制が可能であるが、その時制による解釈が同じではないため、注目すべきである。近過去形 (ha perso) を用いた例文においては息子を失ったお母さんが架空のお母さんである上に、その事象の時間的な位置づけが不明であると言える。それに対し、遠過去形 (perse) を用いた例文においては息子を失ったお母さんが確認のできる人であるため、その事象が過去においてすでに行なわれた事象であるということがわかる。要するに、ここまで見てきた全ての例文からわかるように近過去形は「不定の時間」を表すが、遠過去形は「確定の時間」を表す時制であると言えるだろう。

また、近過去形と遠過去形の置き換えが常にできるという伝統的な説明が不適切であることが改めて明らかになった。その置き換えができる場合においては話者の心理的な判断が決定的であるが、時制の用法は様々な要因によるものでもあるため、一定の用法を見つけるのが難しい。以下ではここまで見てきた近過去形と遠過去形の共通点と相違点をまとめ、その置き換えが可能であるか否かのことをもとにし、複文における時制の一致のルールに適用することもできる。これらを整理すると、近過去形と遠過去形の特徴は以下の三つであると言える。

近過去形	遠過去形
(1) 「完了的アスペクト」 ↓ 事象の完了の局面のみを表す	「アオリスト的アスペクト」 ↓ 事象の終了の局面のみを表す
(2) 「時間的な位置づけの自由さ」 ↓ 発話時以前ではなく、 未来における事象を表すことも可能である	「時間的な位置の確定さ」 ↓ 必ず発話時以前の 事象を表す
(3) 「過程の完了の不定さ」 ↓ 事象の発話時以後の 持続または反復が可能である	「時間的な設定の確定さ」 ↓ 反復や習慣などの 解釈が不可能である

4. 時間副詞との関係について

イタリア語の時制に関して述べる際には時制形式の相違についてのみではなく、もう一つの重要な文法カテゴリーについて述べる必要があり、それはいわゆる「時間副詞」である。言うまでもなく、時間副詞と時制形式の組み合わせは自由なものではなく、あるルールに従うものである。従って、ある副詞と時制の組み合わせが決まっており、それ以外の組み合わせが不可能であると言えるだろう。しかし、場合により例外が現れることもあるため、注意が必要である。

4.1 瞬間副詞

本稿で取り上げるのは *avverbiali puntuali* (瞬間副詞) である「a/in」(～に)「fa」(～前)と *avverbiali durativi* (継続副詞) である「da」(～から)である。結果を先に述べると、近過去形と遠過去形の相違をより示すのは副詞「da」と「fa」であり、それはすでに述べた「完了的アスペクト」と「アオリスト的アスペクト」によるものである。近過去形と遠過去形は同じ枠である「*tempi perfettivi*」に属しているが、完全に同じ働きをしているとは言えない。従って、上記のアスペクトによる区別が決定的な区別である。順番として最初に *avverbiali puntuali* である「a/in」(～に)と「fa」(～前に)の説明をし、その後は *avverbiali durativi* である「da」(～から)の説明をしていく。

一般的に、*avverbiali puntuali* (瞬間副詞) は二種類に分けられ、それらは「直接副詞」と「関係副詞」である。前者は特定の時点に事象を位置づける「alle 5」(5時に)のような副詞を含む組であるのに対し、後者は二つの時点の相関関係を表す「fa」のような副詞を含む組である。以下では「a/in」(～に)を用いた例文を参考にしよう。

(12a) Gianni partì alle 5 (遠過去形)

(12b) Gianni è partito alle 5 (近過去形)

(ジャンニは5時に出発した)



例(12a)と(12b)は「出発する」という事象を過去における特定の時点(5時)に位置づけ、解釈に関する問題は生じない。このことから「完了時制」である近過去形と遠過去形はこ

の副詞との組み合わせを可能とするということが言える。

しかし、関係副詞である「fa」の用法においては問題が生じる。一般的に、この副詞は近過去形のみを許すとされているが、本稿では遠過去形の適用も可能であると考えられている。まず、なぜ一般的に遠過去形の適用が不可能であるとされているかを説明していく。上記のように、「関係副詞」とは二つの時点の間の時間区間を表す副詞であり、その二つの時点は発話時点と過去における時点または過去における時点とその他の過去における時点と可能性として挙げられる¹⁶。「Fa」は過去における事象と発話時点の区間を表す副詞である。説明として以下の例文が挙げられる。

- (13a) Gianni partì due ore fa (遠過去形)
 (13b) Gianni è partito due ore fa (近過去形)
 (ジャンニは2時間前に出発した)

Bertinetto (1986) では例 (13b) と異なり、例 (13a) が非文として扱われ、それは「fa」が「～前に」という意味であり、発話時点基準としているため、現在と関わりのない遠過去形とは対立するからであると説明されている。そして、非文であるのは遠過去形が「アオリスト的」時制であり、この時制により描写された事象は終了の局面のみを表すことも関係している。従って、図1にも見たように、事象の終了から発話時までの過程とその効果が無関係である。以下では一般的な「fa」の用法を図で説明する。

図3 「Fa」>発話時と関係がある時点→「以前」

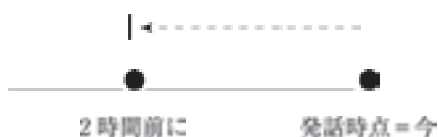


図3からわかるように、基準となる時点は「今」であるため、論理的には遠過去形との組み合わせが不可能であるはずであるが、必ずしもそうではないという視点から本稿で述べていく。そこでは、二つの可能性があり、それらは遠過去形の本質を考え直すこと、つまり現在と繋がっているということ、と副詞の解釈を換えることである。本稿で扱われるのは後者である。すなわち、「fa」を「以前」のこととしてではなく、「そのとき」の意味としても考えればよいと考えられる。

¹⁶ 未来における時点も可能であるが、本稿では述べないこととする。

4.2 持続副詞

以下に持続副詞と近過去形と遠過去形の用法に関して述べていく。瞬間副詞と同様に持続副詞も二種類に分けられ、それは「da」(～から)に関する分類である。一つ目は「da due ore」(2時間前から)のような意味を含む用法であり、二つ目は「dalle 2」(2時から)のような意味を含む用法である。瞬間副詞と異なり、この副詞は二つの時点の相関関係のみを示す副詞であるため、ある時点との直接関係を表す副詞ではない。言うまでもなく、この副詞と共に適用ができるのは持続動詞のみであるため、以下の例文においては持続動詞のみを取りあげることとする。

(14a) Gianni ha dipinto la parete da due ore (近過去形)

(14b) *Gianni dipinse la parete da due ore (遠過去形)

(ジャンニは2時間前から壁に色を塗った)

(15a) Gianni ha dipinto la parete dalle due (近過去形)

(15b) *Gianni dipinse la parete dalle due (遠過去形)

(ジャンニは2時から壁に色を塗った)

副詞「da」が関係副詞であるため、遠過去形の適用が不可能であるのが当然である。そこで、問題なく適用ができるはずの近過去形の用法を詳しく分析する必要があるが、その副詞の適用をする前には近過去形を用いた例(14a)と(15a)の相違に関して説明すべきである。両方とも例文においては二つの時点の間の時間区間が定められるが、完全に同じ解釈が出来るとは言えない。Bertinetto & Bianchi (1996) は以下の通り説明している。

図 4. 「Da」に関する解釈



上記の図は設定時点¹⁷と発話時点が一致していない場合を表しているが、一致する場合もあるので参考のためまとめて以下の図でその場合も表す。

図 5 「Da」に関する解釈



上記の図からわかるように、矢印の方向が同じではなく、これはどの意味を表しているかを以下で説明していく。「Da」により描写された事象がある区間を表すが、例 (14a) の場合はその出来事の完了から設定時点（または発話時点）までの区間を表すのに対し、(15a) の場合はその出来事の開始からの区間を表す。要するに、例 (14a) における解釈はジャンニが壁に色を塗り終わったのは2時間前のことであり、例 (15a) における解釈はジャンニは2時から壁に色を塗り始めたということである。このため、Bertinetto & Bianchi はそれらの用法をそれぞれ「backward-oriented」と「forward-oriented」と呼ぶこととしている。上記の図においては「設定時点」という名称が現れ、それは複合時制の特徴であり、単純時制である遠過去形には存在していない概念である。以上に述べたように、「da」を可能とするのは複合時制のみであるが、必ずしも可能であるとは限らず、動詞の意味の制限の影響も大きい。参考のために、以下の例文

¹⁷ Bertinetto は複合時制の説明する際には必ず「設定時点」を導入する。

が挙げられる。

(16a) *Gianni ha lavorato qui da due anni

(ジャンニは2年前からここで働いていた)

(16b) Gianni ha lavorato dalle due

(ジャンニは2時から働いた)

例(16a)においても例(16b)においても近過去形、つまり複合時制が適用されているのに正しい文として感じられるのは例(16b)のみである。例(14a)と同じ構造であるため、例文(16a)においてもジャンニの「仕事する」という事象が2年前に終わったという解釈となるはずであるが、なぜかこれが正しい文として認められていない。ここで説として挙げられるのは動詞の意味または性質の制限も大きな影響を与えているというところである。すなわち、「*dipingere*」と「*lavorare*」の動詞の性質が異なるため、当然、副詞との適合性も異なる。すでに述べたように、例文(16a)と(16b)は同じ動詞を用いた例文であるが、正しい文として認められているのは例文(16b)のみである。そこで、説として考えられるのは次のことであるが、再び図4を参考にする必要がある。図4からわかるように、「*da due ore/anni*」は「back-oriented」であるため、現在から離れていく出来事を表す。それに対し、「*dalle due*」は「forward-oriented」であるため、現在、つまり発話時に近づいていく出来事を表す。従って、話者は例(16b)における「*da*」が発話時点に近づいているように感じるが、例(16a)における「*da*」が発話時点から離れていくように感じると言える。そのため、現在とは関わりのないように感じられるため、この近過去形の用法が認められていない。そこで、この例文を正しくさせるためには二つの手段の提案ができる。まず、ジャンニはまだ仕事しているか否かのことをはっきりさせなくてはならない。もし仕事をしていないなら「*da*」の代わりに「*per*」の適用が正しい手段であり、そうすると過去における区間を表すこととなる。それに対し、まだ仕事をしているなら副詞を換えるのではなく、時制を換えるのがより正確な手段であろう。この場合、近過去形の代わりに現在形を用いるのはより自然な選択となる。よって、この近過去形は現在形のような働きをしていると考えられ、近い時制であることが言えるだろう。

結論として言えるのは遠過去形と近過去形の相違点が副詞の適用によっても明らかとなり、これはそもそも単純時制と複合時制の違いに関するものである。

終わりに

本稿で中心となったのは近過去形と遠過去形の区別であり、この区別は近過去形と遠過去形の本質によるものであると明らかになった。簡潔に説明すると、この2つの時制は同じ事象を

異なるアスペクト的な視点から描写するため、必ず「置き換え」が可能であるとは言えない。近過去形は完了的視点から描写するのに対し、遠過去形はアオリスト的な視点から描写するため用法の幅も同じではなく、近過去形の用法の幅のほうが広いことが明らかになった。

また、伝統的な説明に従うと、現在と過去時制の間には切れ目があるとされているが、本稿ではその切れ目が過去時制のあいだ、つまり近過去形と遠過去形にあると考えられている。故に、近過去形は遠過去形ではなく現在形に近い時制であるということとなってくる。

(チェスパ マリアンナ・言語文学専攻)

参考文献

- 坂本鉄男 (1979, 2009) 『現代イタリア文法』白水社
島津寛 (1998) 『近過去形の本質』イタリア学会誌
林高宣 (1996) 『時制解釈に関する視点の原理について』宮崎大学 言語研究 109 号
三原健 (1992) 『時制解釈と統語現象』くろしお出版
Arosio F. (2004), Temporal Homogeneity and the Italian Perfect. In A. Alexiadou, M. Rathert, & A. Von Stechow (a cura di), *Perfect Explorations* (pp. 37-66). Berlin, New York: Mouton de Gruyter
Bertinetto P. M. (1986), *Tempo, Aspetto e Azione nel verbo italiano: l'indicativo* - Accademia della Crusca, Firenze
Bertinetto P.M. (1982), Intrinsic and extrinsic temporal references. On restricting the notion of 'reference time' - *Journal of Italian Linguistics* 71-108
Bertinetto P.M., Bianchi V. (1996), Temporal adverbs and the notion of perspective point - *Semantyka a konfrontacja jezykowa*, 1 - SOW, Warszawa
Giorgi A., Pianesi F. (2012), Sequence of Tense and Speaker's Point of View: Evidence from the Imperfect - *University of Venice Vol. 12*
Squartini M. Bertinetto P.M. (2000), The Simple and Compound Past in Romance languages - in *Tense and Aspect in the Language of Europe*, Mouton-de Gruyter
Vanelli L., Salvi G. (2004), *Nuova grammatica italiana* - il Mulino, Bologna